

夜の色

コメディア 4492

高校に入学して半年、やはり慣れないものだというのがよくわかった。

最初の内は、急に厳しくなって体がついていかなかっただけ、なんて考えていたが、半年もすれば流石にわかる、この学校は僕には合わない。

はっきり言おう、高校なんて行きたくなかった。別に才能があるわけではないが、中学を卒業したら、芸能界で生きていく。そう決めていた。

昔から自信過剰な面があり、いつか誰かが見つけてくれる、この才能の塊の原石を。そう考え、日夜動画サイトに動画を投稿していた。正直歌には自信があった。だからすぐにでもなれるだろう、甘い期待を抱いていた。

結果は見ての通り、しびしび学校に行くことになっている。正直ずる休みしたい気分だが、生憎そういう訳にはいかない。親が怖いのだ。

俺は家の中で、社会というものを見てきた気がする。格差社会、とでも言うべきだろうか。

例えば、母親と僕、同じ失敗をしたとしよう。失敗と言っても、床に水を零したくらいだ。

母親がその失敗を犯しても、父親は怒りを噛み殺したように注意するだけで、俺が同じ失敗をすると、何故そこまで?と思わんばかりの説教を食らう。別に大事な書類を濡らしたとかそんなことはない、罪状は全く同じだ。

それを感じ取ったのが、ちょうど5歳のころ。多分その頃から、怒られることに異常に反応するんだと思う。

俺は両親に甘える隙なんてなかった。むしろ何かすることによって怒られるんじゃないか、そう考えて生きてきた。

一時期、不登校になりかけた時期があった。5月の初めの頃だ。

その日の僕は、どうしても学校に行くことができず、その日はバックれて、近くの神社に籠った。家に帰るなんて選択肢は無い。帰った途端、無理矢理行かされるのが落ちだ。

しかし籠ったはいいが、途端に不安が頭を過ぎった。

もし見つかったら?もし警察に話が行っていたら?もし誰かに見られたら?もし巡回中の警官にみつかったら?もし...もし...不安はとめどなく押し寄せてきた。

そして僕は、自分のを傷つけた。

鞆の中を漁り、筆箱を覗き込む。カッターナイフの刃を取り出し、皮膚に当て、勢いよく引っ張る。すると不思議なことに、痛みと共に快感が俺を襲った。

...何だこれは

最初は大きい傷一つだけを作る予定だったが、もう一度同じ場所に刃を入れる勇気はなく、ならばと思い、無数に傷付けた。

その時点で、僕の精神は崩壊していたのだろう。傷口から溢れ出す血を舐め、傷口に頬ずりをする。僕の心の安定剤になっていた。

もっと...もっと...僕はその快感に溺れて行った。

学校を辞めたい、丁度時間潰して帰ってきた僕は、勇気をもってそう打ち明けた。その時の怒

り様、僕はまだ覚えている。

馬鹿なことを言うな、こんなことで社会で生きて行けるか、社会に出たらリスクしたい事に沢山出くわす...

椅子に座っている僕は、壁際に追い詰められ、どうにか逃げ出そうと、足だけを一生懸命動かしていた。震えながら。

僕はその時こう思った。これからずっと苦しむだけなら、生きてなくていいかって...

説教の後、初めて母親が味方だと思った。が、信頼するにはもう遅すぎた。

この後、やりすぎたとも思ったのか、父親が抱きしめようと僕に手を伸ばした。瞬間走る憎悪、僕はそれからどうにか逃れた。

このまま学校に行かなければどうなるかわからない、僕は次の日から学校へ向かった。恐怖を糧にして。

その日から始まった謎のお小遣い。僕にはそれが善意ではなく、罪滅ぼしと繋ぎ止めるだけのものにしか見えなかった。

一応言っておくと、父親は温厚な方だ。仕事上、子供の躰に厳しいのは仕方ないことなのだろうが...

さて、話を元に戻そう。僕はどうも、キツキツのルールはどうも苦手だ。

風紀検査を例に挙げれば、髪の毛1本でも眉や髪の毛にかかっていたらアウト、くせ毛は申請が必要、スカートは床ギリギリ、などなど。

何なんだ?学校は精密機械を作りたいのか?それは集団行動にも言えることだ。

風紀検査と言えば、あることを思い出した。

丁度あの日の次の日、風紀検査があった。いつもならその前には散髪に行くのだが、生憎その時は、引っ越しの準備で忙しかった。

案の定、引っかかってしまった。以前の風紀監査で厳しさは知っている。理由を聞かれたので、素直に引っ越しの準備が忙しかったと言うと

なるほど、お前はトイレも行かず、風呂にも入らず、食事もせず、一睡もせんかったんやな?それぐらい忙しかったんやな?

そう返ってきた。子供か!正直その時そう思ったが、勇気なんてない僕は、その言葉を飲み込んだ。こんな人間が上にいるなんて、何故だか耐え切れなかった。

自然教では、嘘つきを育てるとこなんだな、と思った。それは帰りの掃除の時、フロア担当の先生がオーケーを出したのだが、学年主任は、俺達を呼び出し

何さぼっとうとか?そう言った。

そのまま説教は続けられるが、誰もあのことを言わない。俺は恐怖で萎縮しながらそう思っていた。

説教が終わった後、ある一人が

どうせ言ったって、他人のせいにするとかや一って、言われるだけやん。

そう口に出していた。

怒られることから逃れるために嘘をつく、このままここにいたらそれが当たり前になるのか?俺は

一人そう考えていた。

社会って何を求めているんだろう。正直、正確性などを求めているなら、ロボットに任せてしまえばいいと思う。ホント、そこだけを必要としているならば。

こんな学校だが、一人だけ尊敬する人物がいる。

「何しよんかー!」

廊下に響く、坂本の声。もちろん相手はあいつだろう。

あいつ凄いと思う。俺にはない勇気を持っている。だから正々堂々と、戦うことができる。

俺は近くで見ようと、野次馬に混ざり、様子を見た。坂本の目線の先には、堂々と漫画を読む西原隼人の姿があった。

「学校で読んでいいと思ひよるんか!」

坂本が怒号を浴びせる。西原は何事もないように読み続けるが、坂本に取り上げられる。

「いいとこだったのに...」

漫画を取り上げられ、落ち込む西原。その様子がさらに坂本の怒りを買ひ

「何回やれば気が済むんや!」

バン!坂本は、西原の机の上に、思いっきり両手を叩きつける。

「はい解散かいさーん」

坂本の怒号を聞きつけてやってきた教師たちが、俺たち野次馬を解散させる。正直怖いけど、ギリギリまで粘ってみることにした。

「お前調子乗んなよ?」

坂本の顔は赤みを帯びている。相当頭にきているらしい。

「調子乗ってませんよ」

怯えず、至って冷静に、西原は話す。

「ね、海原權君」

ざわっ!西原以外の全員の視線が、僕の方に集まる。

なんで...なんで僕の名前を...

「調子乗ってんのどっちだよってねえ?」

西原は新たな質問を投げかける。

「貴様あ〜!」

坂本は西原の襟元を掴み、立ち上がらせた。その状況を見て、他の先生たちが、慌てて止めに入る。

「海原」

西原の胸ぐらを掴んだまま、坂本は俺の名前を呼ぶ。

「お前はどうかんだ?」

明らかに怒気を含んだ声。言うまでもなく、僕は怖気づいていた。

怖い、言えるわけがない、本当のことなんて、言えるわけがない...

本当の事じゃなくても、取り繕う言葉さえ喋れるか不安だ...一体なんで...

そうだ、すべては西原のせいだ。西原が僕の名前を言って巻き込んだから!確かに憧れてはいた

けど、こんな奴だったなんて、他人を巻き込んでも、何もしないやつだったなんて!

...グッドサイン?西原の右手は、確かにそうになっていた。

...そっか...お前...味方なんだな。

「その通り...」

僕が出した声はか細く、何を言っているか聞き取るのは、至難の業だった。

「その通りだと思います!」

絞り出した声、喉が痛い、西原、お前を信じるぜ。

この言葉に周りがざわつく。当たり前だ、何の変哲もない同級生が、こんなことを堂々と言ったのだ。

「そうかぁ」

坂本は嫌に滑舌よく、西原の襟元から、乱暴に手を離していった。

「お前ら二人、停学処分な」

呼吸をするかのように、僕達二人の判決が言い渡された。

「ほんとすまねえ！」

ホントだよ、お蔭で今も生きた心地がしない。やっぱり世の中理不尽だ。

僕と西原は、坂本にたっぷり絞られた後、近くのファーストフードの店に立ち寄った。僕はいいと言ったのだが、西原がどうしても奢らせてくれと言ったので、仕方なく付き合うことにした。

「先に席取っといってくれ」

僕に注文する権利はないのだろうか、そのような趣旨のことを西原に言うと

「いいからいいから」

何が良いから。

ふてくされながらも席でまった結果、それが目の前にあるメガセットだ。晩御飯前だよ？

そして話は冒頭に戻る。

「...ああ」

何と返していいのかわからず、僕は曖昧に返した。

「よかったー怒ってなくて」

怒る...か...

確かにこんなことに巻き込まれたら、ブチ切れる人間だっているだろう。もしくは我慢していても、いつ爆発するかわかんない。だからあえてあんな行動をとったのか？怒ってないかどうか確認するために？

「ん？どうかした？」

西原に言われてハッとなる。いつもの癖だ。真剣に何かを考えだすと、腕を組み、項垂れる。よく体調が悪いのかと誤解される。

「いや、なんでもない」

僕はそう言いながら、腕組みを解く。

「そっか」

西原は一言そう言うと、ポテトを一本口に運んだ。

「何か考えてそうだったのに」

僕は驚いた。僕のこの行動を一発で見抜けた人間は、今までに一人もいない。やはり彼の観察力は素晴らしいと思う。

一緒に指導を受ける中、僕は彼の観察力の凄さに驚いた。

廊下での行動、授業中の行動、ボソッと呟いた悪態、顧問としての態度。西原は坂本の痛いところを次々に打っていった。そこから自分の意見を飛ばす。何と頭のいいやり方だ。

自分より強い相手に真っ向勝負を挑んでも勝てない。だからこそ、相手の弱い部分を始めに打ち、弱くなったところで決定打を打つ。卑怯に見えるが、これほど賢いやり方はないだろう。いや違う、このやり方を知っていても、卑怯者と言われることを恐れ、この作戦を使うのを恐れるのだ。実際、僕もそうだ。

だが西原は違った。同じ戦法なのに、西原に俺が抱くものは、卑怯者という感情ではなく、かつ

こいいという感情であった。そんな西原と一緒にいると、勇気さえ湧いてくるのだ。
この違いは何か、多分それは、汚いかどうかだと思う。

「しかしお前馬鹿だよなー」

俺が怒ってないとわかるや否や、西原は俺を罵倒した。何と肝っ玉の太い奴だ。

「せっかくお前の停学阻止してやろうと思ったのによお...」

ウッ、それを言われては何も言えない。

自信過剰が悪いところで働いた、今でも後悔している。

西原と一緒にいて、勇気が湧いていた僕は

「僕達の何が間違ってるんですか!」

心の奥底にあった声を上げる。

その後どうなったか答えは簡単、撃沈だ。

「あん時黙ってりゃーやらせだっって言えたのによお...」

呆れたように、西原はストローをくるくる回しながら言った。ごもっともです。

案外生きた心地がしないのって、自分のせいだったりして...

「お前、本当に怒んねーな」

「え?」

ストローを今度は口の端に加え、西原は僕に問いかけた。

「前々から怒んねー奴とは思ってたけど...」

「怒れないんだ」

俯き、僕は言う。怒らないんじゃない、怒れないんだ。

「僕、ずっと怒られて生きてきてさ、だから怒ってるのに極端に反応しちゃって、心苦しくな
って、だから他の人に同じ思いはさせたくないって思って...」

気が付けば、誰にも話したことなことを僕は話していた。西原隼人、彼は僕の中のなんなんだ。

「そっ...か」

ゆっくりリジュースをトレーに置きながら、西原は呟くように言った。

「俺もうまく行ってねーんだ」

その言葉に、僕は顔を上げる。

「おいおいどうしたんだよ、そんな顔して」

「あっ...いや...」

正直驚いていた。誰かの何かを聞くなんて、今まで無かった経験だ。

「こういう話聞くの初めてだから...」

「まじで?」

「まじで」

マジです。

「小学校は?」

「いじめられてて...」

「中学校は?」

「いじめられてて…」

沈黙。

「そっか」

どうやら西原は、そこを詳しく聞かつもりはなさそうだ。

「まあいいや、聞いてくれよ」

「いいの？」

瞬発的に返した言葉、僕は何の役にも立ってあげられないし…

「あのなー！」

溜め息をつき、僕の両肩に手を置きながら、西原は言った。

「俺は話を聞いてくれるだけで嬉しいんだ」

そう言う顔には、笑顔があった。

「話聞いてくれればスッキリする、だが誰でもいいわけじゃねえ、お前がいいんだ」

お前がいい…今まで誰かに必要とされたことがあったらどうか。

「な、聞いてくれるか？」

僕の憧れであり、初めて僕を必要としてくれた人。断る理由なんて何処にもなかった。

「もちろん」

僕も笑顔で答える。

「ありがとう」

西原はそう言うと、僕の両肩から手を離し、話し始めた。

「夜行性ってどう思う？」

いきなりなんだ？

「夜行性？」

僕は素直に訊き返す。

「そう、夜行性」

西原は、僕を指差しそう言った。

「動物には、昼活動する昼行性と、夜活動する夜行性があるだろう？」

「うん」

昼行性を知らなかったなんて言えない。

「だから人間にもあると思うんだ」

●●●

「え？」

一瞬思考回路が止まる。人間にも二種類いるのか？昼行性と夜行性と。

「まあそうなるわな」

こうなる事は大体予想していたらしい。

「人間は朝起きて夜寝るもんだよな？」

「うん」

普通のことを言われて、少々驚いたが、僕は頷く。

「誰が決めた？」

「え？」

誰が決めたって...

「そういうもんじゃないの？」

「なんでそう思う？」

だんだん西原が、某熱血元テニスプレイヤーに見えてきた。

「そうやって過ごしてきたから？」

「はいそこ!!」

何処だよ。こんな時にも、冷静に突っ込みを入れる自分が少し恐ろしい。

「その固定概念がいけないんだよ」

やっぱりあの人にしか見えない。

「俺は、というより、俺達はそうじゃないんだよ」

今度は西原が腕組みをし、話し続ける。ん？

「俺達ってことは...」

「そう」

頷きながら、西原が言う。

「他にも同じ奴らがいる」

「同じ奴ら...」

僕は呟くように、言葉を繰り返した。

「立派な大人になるためには勉強しろ、勉強するために学校に行け、学校に行くために早く寝ろ」

西原は、一項目に対し、一本ずつ指を立てて話し始めた。

「誰もが植えつけられるサイクルだ」

うん、僕は顔を立てに振る。

「だが不思議なことに俺はその逆だ」

西原は立てた三本指を、もう片方の手で、折りたたみながら言った。

「つまり夜行性と」

「そう」

まるで朝の情報番組みたい僕を指さして、西原は言った。

「夜の方がやる気が出るし、正直昼間はやってらんない」

でもそれって

「昼夜逆転してるんじゃないの？」

「違うんだよなー」

違うんですかー

「別に夜だから特別何かしてるってわけじゃない、ただ本当に夜の方が調子いいんだ」

「ほんとに？」

「ほんとに」

「本気で？」

「本気で」

サクサクと会話が進む。

昼夜逆転，基本的にゲームにはまり過ぎて陥りやすいが...

「ほらガラケー」

多分違うようだ。

「てかまだガラケーなんだ」

「うん」

こだわりでもあるのだろうか。

「それで夜中に出て行くんだけど，それで揉めちゃってさ」

「そりゃそうだろ」

何があるかわからない夜の外，心配する親と対立して，揉めることは容易に想像がつく。

「なあ，夜ってわくわくしないか？」

不意な質問に，僕は答える術を無くす。

「なあ!」

西原に迫られ，催促された僕は，自分の夜のことを思い出す。

「眠たいから特には...」

毎日毎日疲れ切っている僕は，夜は寝る時間という考えしかない。

「そりゃそうだよな」

西原はそういうと引き下がり。

「けど俺わくわくするんだ」

少年のように，曇り無き眼を光らせて，西原は言う。...羨ましいなあ。

「先が見えない夜，その中に何があるんだろうって，危険があるのは承知で，探しに行きたいんだ」

「危険なのがわかってるなら，わざわざ行かなくても...」

「だめなんだよ」

西原はきっぱり言う。

「俺好奇心旺盛でさ，一度わくわくしたら抑えられねーんだよ，だからあえて闇に突っ込んでくんだ」

そして西原はこう続けた。

「安定したルートを進んだ先に，面白さっていうのはないんだよ」

面白さ...

結果が出ればいい，ただそれだけならば全く要らない要素，だがそういう訳にはいかない時もある。

怖かったんだ。自分が面白い方向に進んでも，最終的には引き戻されて終わりなんだって，決して何にも残らないんだって。

「俺は探究心を失わなくていい未来を作りたいんだ，だから俺はああいうの嫌いでね」

西原はぼやかしていったが、僕にはそれが何だか割る。

「僕も嫌いだよ」

全員が全員同じだなんて、僕には到底耐えられそうにないや。

「ああ、知ってるよ」

やっぱり。彼の観察力の凄さには恐れ入るよ。

「お前夢、何だよ」

僕の夢か、芸能界で活躍したい!なんて考えてたけど今は違う。中身が空っぽだった夢とは違う。

「誰にも同じ思いをさせたくない」

第三者の意見で、勝手に未来を決めていいわけじゃない。

「だから一人でも多くの人の支えになりたい!」

今の僕は何もできない、今までだったら諦めていただろう。だけど今は彼がいる、西原隼人がいる。彼の力を借りれるなら、少しずつでも前に進めるかもしれない。

西原は、少し笑みを浮かべていた。

「お帰り」

晩御飯の支度をしながら、母親は僕に言う。僕はそれに「ただいま」と小さく返し、二回の自分の部屋に入る。

鞆を放り、ベットへ倒れこむ。ポケットからケータイを取り出し、パスロックを解除し、白い鳥のアイコンのアプリを起動する。色々な人の呟きを見ながら、色々なことを考える。

停学のことはどう考えても伝わっているはず、ということは晩御飯の時に何か言われるのだろうか。まあそれが母親の分よかったと思う。父親とだったら喋れたもんじゃない。

喋らないんじゃない、喋れないんだ。この前気付いたんだが、大事な話の時に限って、声帯が仕事をしてくれない。理由は全くわからないけれども。

まあ、言われたら言われたで仕方ないし、結局は言わなければなるまい。

そういえば西原は何してるんだろう。帰りがけに連絡先交換したが...

そう思いながら、僕はアプリを閉じ、パズルゲームのアプリを起動する。

そういえばあいつガラケーだったな...なんでガラケーなんだ?まだ学生だから買ってもらえないんだらうか?

そう思いながら、色をそろえるために、指を動かしていた。

「ご飯よー」

「あ」

母親が僕を呼ぶのと、僕がやられたのは、丁度同じタイミングだった。

「停学なったってね」

席に着いた僕に、お茶が入った湯飲みを置きながら言った。

「お父さん、居なくてよかったね」

「え?」

僕が母親の問いに答えるよりも早く、母親は次の言葉を紡いだ。

「お父さんがやり過ぎなのもわかってるし、あんたが持たないだろうなっていうのもわかってた」

何で助けてくれなかったんだ、なんて感情も、怒りも湧かない。助けられなかった理由も今ではわかるし、正直期待もしていなかった。

母親が可哀想だ、こんな僕がそう思ったのは父親が出張に行ってからだ。

昔からなんでも「お父さんに相談してからね」という母親だった。そんな母親に対し、僕は疑問に思った。自分の意志はないのか?と。何でもかんでも言う通りなのか?

父親が出張に行ってから、二人は毎日のように電話をしていた。勿論、僕がその会話に混ざることはない。しかし会話は聞こえてくる。

「こう思っとるんやけど...」

「うん、うん」

「けど...」

「わかった」

こんなやり取りを何回訊いたことやら。いつしか僕の心には、母親を心配する気持ちが芽生えてきた。僕の目には、母親が父親の支配下に見えるようになって仕方なかった。

昔はこの従順関係(?)を見て、僕は生まれて来なかった方が幸せだったんじゃないかな?なんて考えたほどだ。

ただこれには、母親にも少々問題がある。知らなさ過ぎなところだ。

機械全般は殆どNGで、パソコンは愚か、携帯さえも、父親が出張に行くまで拒んだほどだ。その他わからないことには手を出さない、触らぬ神に祟りなし、を実行しているようなものだ。

だが、何故自己決定を下さない?自己決定権を剥奪されたのか?その答えはとうの昔に出ている。

「勝手にしたら怒られるじゃん」

どうやら俺の父親というのは、恐怖を武器に戦ってきた人らしい。

「なんで停学なったの?」

少々話は逸れたが、元の話に戻ろう。

どう答えるべきか、僕は悩んだ。ありのままを言って信じてもらえるだろうか?面倒事に巻き込まれ、勢い任せに本音を言ったら停学になった。こんな話を信じてもらえるだろうか。

僕はお茶を一杯飲む。緑茶の香りが口の中に広がる。

僕は決心して

「面倒事に巻き込まれて、肯定したら停学になった」

と、若干違う形で伝えた。

「そうなんだ」

「え?」

母親の答えはあっさりしていた。もっと何か言われるものだと思っていた。

「理由がわかればそれでよし」

そう言って母親は、配膳の続きを始めた。

僕は戸惑った。晚ご飯がハンバーグだったからじゃない、まるで別人と話してるかのようだったからだ。

母親は配膳を終え、席に着くと、僕の顔を見て

「驚く事も無理ないか」

そう言って笑った。笑った顔見るの、いつ以来だろう...

「初めての子育てで、どうしていいかわかんなくて、チャンと躡ができてないなんて、誰にも言われなくなかったから」

そのまま母親は、何故こうなったかの経緯を話し始めた。

「それでお父さんみたくしっかりやろうって思って、理由に対して言及して、しっかり自覚させないと、また同じことやるんじゃないかって思ったり、何かあったら、自分にも悪いところがあったんじゃないかって、考えて欲しいなって思ったし」

これは記憶にある。理由を、わからない、忘れてた、にしたときの追及は両親とも凄かった。ど

ちらも本当の事なのだ。理由がわからない、イコール忘れてた。さすがの僕も、そこまでは辿りつけた。しかし「忘れてたは理由にならない!」とまで言われてしまうと...嘘をついてまで、理由を付けた。正直自分に興味のないことを、忘れてしまうのは当たり前のことだ。

「けど少しずつわかってきたの、私は私、追求する必要ないって」

そう言って母親はまた笑う。

「ごめんね、今まで嫌な思いさせて」

「やめてくれよ!」

何でだろう、今までだったら何にも感じなかったはずなのに、胸の奥にあるもの...これって一体...

「ごめんね」

母親はもう一度言う

「さ、食べようか」

そう言って箸を渡してくれた。僕はそれを受取る。

「いただきます」

声をそろえて言う。僕は早速ハンバーグに手を伸ばす。ほんの1時間前に、でっかいハンバーガーを食べたというのだが、ハンバーグは別らしい。

ハンバーグの真ん中に箸を入れる。中から肉汁が溢れ出し、デミグラスソースと混ざり合う。

僕は左側の4分の1の部分に箸を入れ、切る。そしてそれを口へと放り込む。それを噛み砕き、飲み込む。やっぱりハンバーグは美味しい。

「あんた、彼女いるの?」

唐突の母親の質問に、一瞬前のめりになる。

「何だよいきなり...」

僕は口を尖らせて言う。

「いやー今まで聞く機会なかったし...」

母親は顔をニヤ付かせて言う。何なんだよ全く...

知らなかった、母さんがあんな性格なんて。知らなかった、母さんがあんなに明るいなんて。知らなかった...

何で知らなかった?結論は出ているが、わざわざそれを言うのは馬鹿馬鹿しいと思う。

僕は携帯を取り、パスロックを解除すると、晚ご飯前にやっていたパズルゲームを再開する。

ピコン、通知音と共に、上にバーナーが出る。正直、ゲーム中のバーナーほど嫌なものはない。だが、ふと見たバーナーの内容に、目を疑った。

『西原隼人さんが電話番号であなたを登録しました。』

そのバーナーの発信源のアプリは、メールや電話の代わりに用いるあのアプリであった。

何故だ?彼はガラケーなんだぞ?あれって使えるのか?あ、確か使えるって話聞いたことあるような...でも面倒くさいって...

そんなことを考えていると、西原から電話がかかってきた。

「もしもし？」

『あーもしもし？』

携帯から聞こえてきたのは、いつもと変わらぬ明るい声だった。

『友達登録しといたからさー、承認しといてよ』

電話の内容は、さっきのアプリの事だった。

「承認って...お前どうやって...」

『パソコンだよ』

パソ...コン...

なるほど、それは盲点だった。僕は携帯がある分、パソコンを使わないので、その発想はなかったのだ。

「なるほど...」

一つ一つ、区切るように僕は呟く。

「わかった、認証しとく」

『おう、頼むわ』

そう言って電話は切れた。

ピコン、また通知がなる。バーナーをタップし、トーク画面を見てみると、そこには白くて頭が丸っこい例のキャラが、グッとサインをしているスタンプがあった。

僕はクスッと笑いながら、上に表示されている項目から、承認する、を選択した。そして

『承認したよ』

と返すと。西原からは、また同じスタンプが帰ってきた。

「www」

僕はこう送り返した。そういえばこれで会話したのっていつ振りだろう...天井を見上げて考えていた。

『じゃあ行ってくるわ』

西原からの返事、一体何処に？

「何処に行くの？」

シュッ!

『集会場』

『お前も来ないか』

僕がそう言われたのは、停学処分2日目、例のアプリで西原と会話している時だった。

「だって明日はがっこ…」

そう言いかけて思い出す。

壁に掛けてあるカレンダー。そこにはしっかりと、停学の期間が記されてあった。

今日は日曜日、いつもの癖でそう答えてしまった。

「停学中だったな」

僕は自分に言い聞かせるように言った。

『そう、だからこそ有効に使おうぜ』

有効にか…

『停学を』

確かにそれは、一理あるかもしれない。母さん一人だけの今の家なら、夜中にこっそり抜け出すことも容易だろうし…

「あ」

僕は壁にぶち当たる。

「先生に見つかったらヤバくない？」

一番大事なところを見落としていた。停学くらった上に深夜徘徊、ばれたらどうなるか…

『ああ、大丈夫だよ』

僕の心の中とは裏腹に、西原はあっけらかんと答える。そんなわけないだろ。

『俺一回も出くわしたことはないし』

そりゃ今まで出くわさなかったかもしれないけど…

『絶対バレない、保証する』

どこにそんな根拠が…

そう思いながら、返す言葉を探していると

『…信じてないだろ』

ギクッ!本当にこいつは恐ろしい…

『俺、お前の力が欲しいんだよ』

え?今なんて?

『お前の…』

「ちょっとまってちょっとまって」

お兄さん。僕に力?そんなのないよ?

『ん?』

ん?じゃないよ、ん?じゃ

「僕に…力があるとか…」

『言ったよ』

言われた、先を見越されて言われた。そして言われてた、力があるって。

僕は彼の観察力を高く評価していたが、今回ばかりは、その評価を下げる他ない状況になってしまった。

『また自分蔑んでんだろ』

全くもってその通りです。と言うより、能力は無い。

『いいか、お前には能力がある』

「だから無いって...」

『最後まで聞け』

「はい」

大人しく聞くことにする。

『俺、お前と会話してて思ったんだ、話聞くのうめーなーって。今まで色んな人間と話してきたけど、お前ほどスッキリした奴はいなかった。俺こんなんだからさ、カウンセリングとか受けたことあんだよ。けどだめだったわ、合う合わないがあるかもしれないけど、俺にはどうも合わなかった。マニュアル通りの応対、幾人のカウンセラーとかかわってきたけど、だいたい皆同じだった。何て言うんだろ、何か...繋がらない、って言うか、遠いって言うか...沢山の人の相手をしなきゃいけないから、一人に構ってられない、だからこそ深く入り込めない、深く入り込むと、他の所で支障をきたすかもしれないし、最悪自分が鬱になるかもしれない。そういうことがあって、俺はそういう距離感を取ってるんじゃないのかなって思ってる。けどお前は違った、近くに寄り添い、一緒に悩み、考えてくれた。無理にとは言わねーけど、あいつらのためにも、話聞いてやってくんねーかな...』

そんな...そんな事はやってない、過大評価もいいところだ。僕はカウンセラーと会ったことないからわかんないけど、絶対僕なんかより話聞くのは上手いと思うし、だいたい、そういう仕事じゃないの?カウンセラーって、違うのかな...

僕が話を聞いたって、西原が言ったみたいに、合う合わないがあるだろうし、それで余計に...

『逃げるのか?』

...誰?

携帯からは聞こえてこないから...

『いつまで逃げるんだ?』

心だ...心の中の自分が、自分に問いかけているんだ。

『いつまで逃げればいい?』

逃げてなんかないさ。

『そうやって嘘ついて』

嘘はついてない。

『怖いんだろ?何か自分のせいになるのが』

怖いよ、当たり前じゃないか。

『お前の夢、何だよ』

...え?

『お前の夢，何なんだよ』

僕の...夢...?

『そうだよ，お前の夢』

一同じような人の役に立ちたいー

...?!

『思い出したか?』

でもそれとこれは...

『甘えるのも大概にしるよ?』

?!

『誰かの役に立つ，お前が言う役に立つって言うのは，そいつの人生を預かるってことだぞ?』

そんな大きなこと...

『大きなことなんだよ，お前が助言して，そいつが対立を起したらどうする?一緒に戦う覚悟はあるか?』

...

『無いならそれは，上辺だけの大人となんちゃ変わらねーよ』

...

『お前が嫌っているあの連中とも同じだ』

同じなんかじゃ...!!

『同じなんだよ，いいか?学校って言うのは中小企業だ。社会って言う大手会社が欲しがってる部品を，学校はせっせこせっせこ育てる。そぐわない規格外品はポイだ。まあ今じゃ，規格外品をどうにかちゃんとした部品にしようとしてるがな。そして出来上がった部品は大手会社に送り出される，そして消耗するまで働くんだ。どうだ?今のお前の考えは，話を聞きます。立ち直ります。じゃあ頑張ったら後は知らないよ。何が違う?』

それは...

『人間誰しも帰って来れる場所が必要だ，そんな時に帰って来れると思ってたところに裏切られてみる?どうなるかわかるよな?』

...でも

『でもじゃねえ』

一人で全員なんて...

『はあ...いいか?そりゃ一人でやろうとしたら潰れちまうだろうよ。お前が全部やるんじゃない，お前が発信源だ』

発信源...

『そうだ，コツコツやってりゃー，お前と同じことをしたいってやつに出くわすさ，後はお前が信じるだけだ』

信じる...

『お前がそれに時間かかるのは知ってる，焦る必要はねえ』

でも...

『任せてたそいつがやらかしたら、お前が聞いてやればいい』

?!

『何かやらかすって一のはSOS何だろ?だからこそ、お前の助けが必要なんだよ』

SOS...

『そしてお前が苦しくなったら、西原に頼ればいい』

なんで?!

『西原はお前を頼る、お前も西原を頼る。何かを始めるときに、助け合える仲間がいらっしゃるっていうのは、相当いいことだぜ?』

助け合い...

『お前は馬鹿なんだよ、誰かに頼ってたら誰も安心して相談できないって。そのせいで不安定になってたら、誰も相談しないぜ?』

...

『どうだ、やってみるか?』

...確かに、僕は誰にも頼らなかった。弱い部分を見せると、誰も相談してくれないんじゃないかって。でも違った。

一人じゃ不安だらけですぐ潰れちゃうけど、何にもできずに否定的になるけど、今の僕に入るじゃないか、最高の相棒、西原隼人が。

『かいはら一、おーい、KA☆I☆HA☆RA』

電話越しに聞こえてくる西原の声、集中し過ぎて耳に入っていなかった。

「ああ、ごめんごめん」

僕は詫びを入れると

「行くよ、僕」

しっかりと意思表示をした。

この決断をどう言われたっていい、頭の中で都合よく解釈したと思われてもいい、愚かな決断と思われてもいい。

僕は僕が信じることを、ただただやるだけだ。

『そっか』

そういう西原の声は、少し嬉しそうだった。

『じゃあーこの前の店集合な』

そういえば西原は僕の家を知らなかった。少々遠いが、そこが一番確実だろう。

『ありがとな』

西原は少し照れ臭そうに言った。

「いや、こっちこそありがとう」

『え?』

西原は驚いていた。

「僕、夢見るだけで、ずっと行動しなかったんだよ。自分の責任になるのが怖くて、逃げてたんだよ。けどこうやってチャンスをくれた、だから僕、頑張ってみようかなって思えたんだ」

チャンスを貰い、自分の中で試行錯誤し、最終的に辿り着いた答えを、西原に伝えた。

『やめろよ...大したことじゃねえし...それに...』

西原はあからさまに動揺していた。

『あいつらを少しでも笑顔にしてやりたい、だから頼んだんだ』

やっぱり彼は

「優しいな」

『優しかねえよ』

予想通りの答えが返ってきた。

「なあ」

僕は決意した。確かに、やる気には火が付いたし、もう逃げるのもやめた。だけどこれだけは、これだけは確認しておかないといけない。

「僕達って...友達だよな?」

意を決して伝えた言葉。たった数秒の間だったはずなのに、僕にはとても長く感じた。

『当たり前だろ?』

「どこ行くの？」

玄関で靴を履いていると、背後から声。間違いなく母さんだった。

パチリ、手探り状態だった玄関に明かりが灯る。後ろを振り返ると、パジャマの上にカーディガンを羽織った母さんが立っていた。

気まずい沈黙、部屋に戻るか？確かにそれが安定だが、さっきの覚悟はどうした、そんな生半可なものなのか？

「ごめん、母さん」

これを乗り越えられなくてどうする、この先もっと大変なんだぞ。

「俺、行かなきゃいけないところあるから」

まっすぐ母さんを見据えて行った。表情は変わらない母さん。

母さんの口角が少し上がった。

「さすが男の子！」

バン！思いっきり肩をど付かれる。勿論僕は、2、3歩よろめいた。

「よく言った」

今度は僕の両方の肩に、両手を置いて母さんは言った。

「気になることがあるんでしょ？心配なことがあるんでしょ？だったら行きなさい」

「いいの？」

僕は思わず訊き返した。

母さんは頷いて

「うん」

まっすぐ僕を見据えて言った。

「もやもやしたまま引きずっちゃダメ、でも解決したら戻ってくるのよ？いい？」

「わかった」

僕も母さんをまっすぐ見据えて言った。

例のファーストフード店へ向かうと、入り口に西原が立っていた。

「よう」

「ごめん、待たせた？」

僕は小走りで西原の元へ向かう。

「別に待ってねーよ」

西原は笑顔でそう答えた。

そういえば、西原の私服を見るのは初めてだな。全体的に黒で統一してある、闇に紛れるため？一方の僕は、ボタンシャツの上にパーカー、ジーパンにスニーカーという格好だ。

「よし、じゃあ行くか」

特に洋服に対してツッコまれなかったので、僕は安心して彼に付いて行く。

「そういえばさあ」

ほどなくして、西原は口を開いた。

「なんであんなこと訊いたの？」

「え？」

「ほら、俺達友達だろ、てきな」

「ああ」

今の今まで忘れていた。

「僕、あんなでっかいこと言ったけど、一人じゃ何にもできないからさ、支えが欲しかったんだよ。だから怖かったけど、確かめたかったんだ」

「そうなんだ」

西原の返答は、案外あっさりしていた。

「俺は見捨てたりしない、俺はお前を必要とする、だからお前も俺を必要としていい、わかったな？」

ビシッ顔を向けられ、指を差される。

「うん」

僕はまっすぐ前を向いてそう言った。

「おう、それでよし」

僕は何だかそれがおかしくて、少しだけ笑った。

「ねえ、どんなところの？」

話も一段落したと思ったので、ちょっとした疑問をぶつけてみる。

「ああ、今から行くところ？」

「うん」

ずっと気になっていた、一体どんなところに夜な夜な集まっているんだろう。

「空き家だよ」

「あっ空き家?!」

「ん?どうした？」

あっ空き家ですか、へえ...

何を隠そう、僕は心霊現象といった類が大の苦手なのだ。お化け屋敷なんてもっての外、修学旅行で入った際には「お前が一番怖かった」といわれる始末だ。

「お化け...出ないよね？」

「お化けえ？」

あ、明らかに馬鹿にされてる、下に見られてる。そんなことはどうでもいい、お化けいないよね？

「居たら俺も行けない」

●●●

「え？」

数秒思考が止まったが、今さっき確実に、お化けが居たら行けないって言ったよね？

「お化け...怖いのか？」

コクン、西原は首を縦に振る。

「お化け屋敷ダメ？」

コクン、これまた縦に振る。

「心霊特集...ダメ？」

コクン。

よかった同じだ。

「誰にも言うなよ？」

そういう西原の顔は暗かった。それもそうだろう、先生達にあんな態度を取っているのに、お化け類が怖いってばれたら...なんだか西原が可愛く見えてきた。

「お互いね」

僕がそういうと、お互いに顔を見合わせ、コクンと頷いた。

「で、さっきの話に戻るけど」

流石、切り替え早い!

「その空家っていうのがさ、人目に付かない場所にあって、まあその分入り組んだ路地とかに入るけど、人なんて来ないから、安心して使えるんだ」

そういう西原の体は、細い路地に吸い込まれて行った。慌てて後を追いかける。

「こんな風に入り組んでるから覚えるのに時間かかるけど」

確かに時間かかりそうだ。正直今も、元の場所に帰れるか?と聞かれると、答えはNOだ。

「ぼら、着いた」

西原の後ろから顔を出す。そこにはボロボロの家が建っていた。

「さ、行くぞ」

ドアはないらしく、西原はそのまま進んで行った。僕も後に続く。

ぎしぎしと音を立てる床、埃っぽい室内。至る所に穴が開いているため、月明かりが道を照らしてはいるが...

「誰かいるかー？」

西原が、奥の方に向かって叫ぶ。

「あ、きたきた」

奥から女の子の声、こんな暗い中に一人で居たのか?しかも女の子が?

西原はポケットからマッチを取り出すと、マッチを擦った。ほんのり周辺が明るくなる。近くに蠟燭があるのが見て取れた。西原はその蠟燭に火を灯す。

「明かり点けろって言ったろー？」

どうやらその蠟燭は、燭台の上に立っているらしく、西原は燭台の取っ手の部分を持つと、奥の方を照らした。

「ごめんごめん、めんどくさかったから」

蠟燭の明かりで、声の主が浮かび上がる。やっぱり女の子だ。椅子に座っていて、半袖のTシャツに、下はミニスカート（パンツ見えそう...）靴はスニーカで生足か...ごちそう様です。

「あれ?後ろにいるのって新しい子？」

多分僕を指さしながら、彼女は言う。

「ああそうだ」

ビューン!!西原が言い終わるのが早いかな否や、彼女は全速力で僕の目の前に現れ、僕の両手を包み込むように握ると

「ヤンデレ好き？」

唐突な質問を浴びせられた。

ヤン...デレ...?

勿論言葉の意味が分からないわけではない。

「はあ...」

西原が頭を抱えながら溜め息を吐く。

「お前自己紹介をするって概念はないのか」

そのままの体制で、西原は言う。彼女は「あっそっか」と呟くと

「はじめまして高本真実です、よろしく」

僕の両手を開放して言った。じゃなきゃ今彼女は僕に手を差し出せない。

「海原權です、よろしく」

僕は作者が忘れかけていた名前を伝え、握手を交わした。

「さて、自己紹介も終わったところで」

高本は、どこぞの裁判ドラマで見たことあるように、指をピンと伸ばして言った。

「ヤンデレ好き？」

僕は笑顔のまま微動だに出来ない、タスケテ西原。

「全くお前はいつもいつも...」

見兼ねたようにして、西原が会話の間に入ってくれた。

「こいつわかるとおりヤンデレ好きなんだわ」

うん、そこはわかってる。

「それで仲間が欲しいか知らねえけど、ここに来る人間全員に質問してんだよ」

なるほど、そういう訳だったのか。ん?全員?

「こいつが俺と同じく一番古参だから、全員この洗礼を受けて来たってこと」

なるほど、そうだったのか。

「えーだって可愛いじゃーん、ヤンデレの女の子」

「何処がだよ」

どうやら西原はヤンデレが嫌いらしい。

「いや、可愛いよ」

二人がこちらを見て固まる。一人は満面の笑みで、一人は顔面蒼白な表情で。

さっきは不意な質問だったため、思考回路が一時遮断されていたが、僕自身、ヤンデレは嫌いなわけじゃない。

「だよねだよね、わかってくれる？」

またもや僕の手を包み込み、目をキラキラさせて言う高元。まるで尻尾を振る犬のようだ。

「お前...」

一方言葉を無くした西原，そりゃ驚くよね，一回も言ってないもん。

「これも愛情表現の一つだもんね」

「ねー」

どうやらこのことは話が合いそうだ。

ヤンデレ，それは特徴的に，血塗られた部分が特筆されているが，僕からしてみれば，愛し方がわからないだけなんだと思う。だから周りに危害を加えるし，執拗な束縛を強いるのだと思う。僕はそんな子たちの力にもなりたいし，僕が犠牲になるならなってもいいと思う。

「お前の性癖...変わってんな...」

性癖って，変わってるもんじゃないの？

「まあいいや」

そういうと西原は，高本が座っていた椅子に腰かける。

「離してもらっていいかな？」

いつ言おうかと思っていたけど，僕の両手は彼女に束縛されていた。

「あ，ごめーん」

さっき西原に謝ったみたいに謝ると，高本は僕の手を開放した。

「他の奴らは？」

西原が高元に訊く。

「知らない，今日は来ないんじゃない？」

そういつて高元は，机の上に座る。その机，埃まみれじゃないか？

「ま，それならおいおい会わせるとして」

何処か座るところがないか辺りをきょろきょろしていると

「ようこそここへ，權君」

歓迎の言葉をかけられていた。

「そーいえば」

丁度手頃な台座を見つけ、僕がそれに腰掛けたと同時に、高本は口を開いた。

「なんで權君連れてきたの？」

ドキッ

虐められてきた僕は、今まで異性に名前を呼ばれたことが親以外になく、不甲斐無いがドキッとしてしまった。

「ああそれはだな」

西原は足を組み、どこかしらを指差して口を開いた。

「こいつの才能を買ったんだよ」

どうやら指が差している先は、僕だったらしい。

「才能？」

高本は首を傾げる。

「こいつもいろいろと不満持ってんだけどよ、人の話を聞くスキルはすげーんだよ、半端ない」
そんなことはないよ、いつもだったらこう否定するけれど、今は変わらなくちゃいけないんだ。
僕は後頭部を掻きながら、「あはははは...」と笑って流した。

「ふーん」

そんな僕を見て高元はそう言う

「あんたが言うんだったらそうかもね」

あっさり認めてしまった。どうやら西原の能力は理解しているようだ。

「じゃあさ」

死し原はさっきみたく詰め寄ってきた。僕は反射的に、両手を後ろに回した。

「私の話聞いてくれる？」

「え？」

僕は驚いた。出会って数分しか経ってないのに、そんな話をして大丈夫なのか？

「そいつはフレンドリーなんだよ」

高本の後ろから西原の音がする。

「だが合わないと思ったやつとはコンタクトを取らない」

つまり僕は合わない奴ではないということか。

「だからこいつは俺以外の奴とは話さない」

「合わないんだもん」

普段どういう状況なのかが気になるが、今はそれよりも

「基準ってあったりするの？」

多分西原も合う人間っていうことは、ヤンデレの質問は全く関係ないであろう。

「優しいかどうかだよ？」

「え？」

最近、この単語をよく使うような...驚く事多いな...

「ほら、私ってこういう性格じゃん。人懐っこく絡むんだけど、大概の人にうざがられちゃってさ...だから受け止めてくれる人が好きなんだ」

好き...落ち着け、海原少年。彼女が言った好きはLOVEじゃなくてLIKEだと考えるのが妥当だ。異性との関わりがないとここまで来るか...

「どうしたの？」

高本の声に、ハッと我に返る。

「え?あー大丈夫大丈夫」

心臓の鼓動以外なら。

「だから捨てられたのかもね」

表情、トーンが暗くなる。これは僕でもわかる、決して明るい話なんかじゃない。

「こっから本題だけど、いい？」

僕はゆっくり頷く。生唾を飲み込みながら、自分が少し汗ばむのを感じる。

「家共働きでさー、両親の愛情っていうの?それがわかんなくてさ、小学校の時から色んな人に、ぎゅーって引っ付いてたんだよ。なんでかわかんないけど、そうしたら落ち着くのね。だから家に帰るのが嫌だった。家に付いたとたんに、虚無感て言うのかなー...多分淋しさなんだろうけど、それに押しつぶされちゃって、混乱して、どうしたら苦しくなくなるのかなって、訳わかんなくなって、親は親で疲れてるから構ってくれないし...嫌になっちゃって。それで夜の街に繰り出したの。最初は親が夜勤の時だけだった、怒られるのめんどくさかったし、けど次第に家にいる日が辛くなって、毎日のように外に出た。ある休日の日、怒られたねー、なんでそんなことをするんだ、いい学校に入れないだろう、就職に響くのがなんでわかんない?俺達の面を汚したいのか?正直呆れたね、気にしてるのは世間体であって私なんかじゃない。だったら私じゃなくてもよくない?『そんなに世間体が大事なら私なんか捨てればいいじゃない!』そういう言い放って家から出た。泣きながら走った、宛なんて何処にもない、でも永遠に走った。公園で泣いてる時に、最初の彼氏に出会った。私に手を差し伸べてくれたんだ、大丈夫って?その優しさに私溺れちゃってさ、付き合ってくださいって言って、付き合い始めたの。でも捨てられた。偶然浮気現場見ちゃってさ、何でなの?って泣きながら訴えたら、『お前、重いんだよ』だって、次も、その次も、同じ理由で捨てられた。だから男の人を好きになるの怖くなっちゃって、女の子のことが好きになっていった。女の子ならぎゅーってしても怒んないし、一緒にいてくれる。けど昔の恐怖が拭えなくてさ...だからヤンデレにはまっちゃたのかな、猟奇的なほどに必要とされたい、そう思っちゃうんだよね、私。それに未だに親とうまくいってないし、だから私という存在を欲してくれる人が欲しいの」

少し似てるな...僕は話を聞きながらそう思った。家は共働きではないけれど、怒られる恐怖で甘えることはできなかった。だからこそずっと本を読んでいた。その物語の中の方がよっぽど素晴らしく、現実に変えるのが嫌なくらいだった。そう言えばその時、僕も同じ虚無感を味わったような...

「...泣いてるの？」

高本は僕を見て言う。泣いてる?僕は指を目の下に持っていき、拭った。すると指は、確かに水分をぬぐっていた。

虚無感の苦しみ、それがわかるからかもしれない。僕は袖で涙をぬぐうと

「ホントだ、泣いてる」

少し笑っていった。しかしその声は、どう聞いても涙声だった。

「初めてだよ...」

高本は呟くように言う。

「私の話聞いて泣いてくれた人、初めてだよ」

高本は、少しはにかんで言ったが、斜め下を見る顔は、悲しい表情をしていた。

一何でだろう、胸が締め付けられるのは...一

「やっぱりすごい才能の持ち主だよ」

今度は満面の笑みで、高本は言った。無理は見受けられない。

「私捨てられてきたから、男って残忍なんだなって思ったけど、そんな奴ばっかじゃないんだね」

捨てられた、この言葉にリンクするように、胸に痛みが走る。なんでだ?

「そうそうこんなに優し...」

「はいはいそうですね」

「んだとコノヤロー!!」

途端に西原と高本の追いかっかが始まる。全く何歳だよ...

キャッキッと声を上げる高本、少し声を荒げながら追いかける西原、そんな二人の様子を見ると、自然と笑顔がこぼれた。

一暴れ済んだところで、今日はお開きになった。迷路のような路地を抜け、反対方向に家がある高元と別れ、僕達二人は、元来た道を歩いていた。

「なあ」

空を見上げながら、西原が独り言のように訊く。

「何?」

僕は西原を見て言う。

「お前ってなんでそんな能力持ってんの?」

そんな質問されても

「わかんないよ」

としか答えられない。

「じゃあさあ」

そのままの状態、西原が再度訊く。

「昔からやってることとかある?」

そう訊かれ、頭を回転させる。

「読書?」

他にこれ、というものが見当たらなかったため、僕はそう答えた。

「読書ねえ...」

そう呟いて少し黙った後

「追体験って知ってるか？」

「追体験？」

僕は訊き返す。聞いたことない言葉だ。

「まあ俺も詳しくはわかんねーんだけどよ」

どうやら説明してくれるようだ。

「物語とかを読んで、その内容が、あたかも自分に起きたように感じる現象の事」

ここで一旦区切り

「らしい」

と付け加えた。

「つまりお前が親身になって話聞けんのは、その追体験が上手いこと作用してんじゃないか、って思ってさ」

追体験...確かに昔から物語に浸ることはよくある、それが抜けずに苦勞したことも...それがそうなのか...?

「これはあくまで俺の推測だけだな」

念を押すように西原は付け足した。

帰ったらちょっと調べてみよう、忘れないうちにメモメモ...携帯を取り出し電源を付ける。

「ワッ!」

「ん?どうした」

ディスプレイに表示されているのは4 : 2 1, いつもなら間違いなく寝ている時間帯だ。というよりもそんなに時間が経ったのか?

「いや、時間見て驚いちゃって...」

そう言う僕の携帯のディスプレイを覗き込む西原。

「え?4 ; 1 2 ?」

不思議そうに、ディスプレイに表示されている数字を指さしながら言った。

「いつもだったら寝てる時間だから...」

「あー」

納得いったようだ。

「夜更かししたことないんだ」

「...ないなー」

よくよく考えるとそうだ、初夜更かしだ、記念すべき初夜更かしではないか。

「お前ほんと真面目だったんだな」

「それはない」

真面目、その言葉は昔っから嫌いだった。したくて真面目にしているんじゃないんだ、心のどこかでそう叫んでいた。

「そっか...」

西原は、少しずつ明るくなりつつある空を見ながら言った。

「ねえ」

そんな西原に僕は声をかけた。

「ん？」

西原はこっちを向く。

「また行ってもいいかな？」